

明治期ジャパノロジストと祖先崇拜概念 —実証研究の前夜—

問芝 志保

キーワード 祖先崇拜、神道、進化主義、宗教起源論
日本学（ジャパノロジー）

1. はじめに

(1) 問題の所在

近年における日本の祖先崇拜研究¹は、研究史を記述する際に、柳田國男の「葬制の沿革について」（1929）や「家永統の願い」（1931）、もしくは戦後に刊行された『先祖の話』（1946）を始点とすることが多い。日本の祖先崇拜を論じた著作物は明治期にもすでにならりの数が存在していたにもかかわらず、それらは先行研究として扱われてこなかった。それは、それらの著作物が経験的データにもとづく学術的な実証研究ではなく、思弁的・理念的・規範的な言説としてみなされたためであろう。フィールドでの聞き書きや実見によるデータ蒐集と帰納的実証をめざす日本民俗学の創始とともに、学術的な祖先崇拜研究が始まったとみるのが、これまでの一般的な理解であった²。

これと同様のことが、日本にかぎらず世界各地の祖先崇拜を対象とした人類学的な研究についてもいえる。20世紀初頭までの祖先崇拜研究は、社会進化論のパラダイムのもと、祖先崇拜が宗教の発展段階のどこに位置するかに主な関心をおいた。しかし戦後、実証研究の方法論が確立していくとともに、そうし

1 本稿では便宜上、柳田以降の実証研究を祖先崇拜「研究」と呼び、それ以前のを祖先崇拜「論」と呼んで、使い分けている。しかし、実はこの「研究」と「論」とは地続きであって厳密な切り分けは難しいのではないかとの問題提起を、本稿は大きな見通しとして展望するものである。

2 進化主義パラダイムに対する批判が高まる時代以前に刊行された、前田卓『祖先崇拜の研究』（青山書院刊、1965年）などでは、戦前の業績が多く引用されており、この傾向はみられない。近年の研究書のなかでは、文化人類学者の上杉妙子による著書『位牌分け—長野県佐久地方における祖先祭祀の変動—』（第一書房、2001年）が、穂積陳重を「日本における祖先祭祀研究の先駆者」とし、穂積の『祖先祭祀と日本法律』（穂積巖夫訳、有斐閣、1917年）を先行研究として挙げており（p.8）、例外的である。

た問いそのもののはらむ問題性が徹底的に反省を迫られるようになって以降、往年の進化主義的な宗教起源論や祖先崇拜論は、先行研究としてはみなされなくなり、今や古典としての意義さえも見失われつつあるとあってよい。

拙著（2020）もそうした捉え方を受け継ぎ、明治～昭和戦前期においてさまざまに展開された祖先崇拜論を、先行研究としてではなく、同時代の国家外交政策と深くかかわっていた重要な言説と位置づけた。その結果、国民国家成立期の日本の祖先崇拜論とは、19世紀の西洋における進化主義的な宗教理解、すなわち祖先崇拜が「原始的」な宗教と位置づけられていた状況のもとで、西洋のまなざしを意識したナショナルアイデンティティの問題と結びつき、国家観や日本文化論として立ち上げられていったものであることが明らかとなった。さらに重要なことに、祖先崇拜を古来より続く日本の国民的習俗として位置づけようとする近代の知識的言説が、国民道徳論として公教育をとおして国民レベルで広く共有され、以降の日本の祖先崇拜「研究」のみならず祖先崇拜「それ自体」の形成に深く関わったことも示唆されたのであった³。

さて、ここにおいて、戦後日本の祖先崇拜および祖先崇拜研究が、進化主義パラダイムや国民道徳論と不可分であった明治～昭和戦前期の祖先崇拜論にどのくらい直接／間接に影響を受けてきたのかという問いがあらためて浮上してきた。柳田を含む戦後日本の知識人が19世紀人類学者の著作物を読破し大いに参考にしてきたことは疑いなく⁴、また国民道徳論を教えられた世代でもあると考えるならば、彼らの祖先崇拜研究がそれらの認識枠組みに全くとらわれていなかったと想定することは難しいように思われる。

実はこの点はこれまでも複数の論者によって指摘されてきた⁵。たとえば鈴木

3 間芝志保2020『先祖祭祀と墓制の近代—創られた国民的習俗—』春風社、p.112。

4 高橋治2000『柳田國男の洋書体験 1900-1930』柳田國男研究会編『柳田國男研究年報—柳田國男・民俗の記述—』3、岩田書院。『柳田國男事典』の「小泉八雲」項（執筆者：小泉凡）によれば、柳田はハーンの本を通読しており、その日本理解を肯定的に評価していた。ただし遺作の『神国日本』については「混迷に向かって居た」と評したという。

5 森謙二1992『穂積陳重と柳田國男—イデオロギーとしての祖先祭祀—』黒木三郎先生古稀記念論文集刊行委員会編『現代法社会学の課題—黒木三郎先生古稀記念—』上、民法法研究会、林淳2006『国民道徳論と「先祖の話」』国際宗教研究所編刊『現代宗教2006』、碧海寿広2007『国民道徳論の残存—五来重の民俗学を例に—』『社会学研究科紀要』65、など。

岩弓は、一方では明治期以降のエティックな視座で翻訳語の「祖先崇拜」が論じられてきた流れと、他方では柳田によるイーミックな視座であえて和語「先祖」を用いて論じられてきた流れとが併流していたことを指摘している⁶。では、祖先崇拜論をめぐるこの二つの流れはいかに互いに影響しあってきたのだろうか。その具体的な検証作業が、研究史上の課題として残されているといえよう。

この課題に対する一つの作業として、本稿は、明治期に活躍した西洋出身のジャパノロジスト（「日本学」研究者）に焦点をあて、彼らが当時の進化主義的パラダイムのなかで日本の宗教と祖先崇拜をどのように位置づけていたかを、特に祖先崇拜の概念設定に注目しつつ明らかにすることを目的とする。

(2) ジャパノロジストの祖先崇拜論を対象とした研究

詳しくは本論で述べるように、明治のジャパノロジストは日本の祖先崇拜を神道とのかかわりでとらえた。

そこで、当時における西洋人の神道論についての先行研究をみると、すでに安津素彦や平川祐弘をはじめ、ウルズラ・フラッヘ、佐藤一伯、中西正史、牧野陽子、山下重一などにより成果が蓄積されている⁷。近年のものでは小山騰の『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み—国学から日本学へ—』が、本稿が対象とするジャパノロジストの膨大な蔵書を調査し、彼らの神道研究についての重要な知見を提供している。

6 鈴木岩弓2017「祖先崇拜」月本昭男編『宗教の世界史1 宗教の誕生—宗教の起源・古代の宗教—』山川出版社、p.94。

7 代表的なものとして、安津素彦・上田賢治1966「外国人の見た神道—戦前篇・戦後篇—」神道文化會編刊『明治維新神道百年史』第二巻、安津素彦1980「異邦人の神道観」白帝社、中西正史2003「アーネスト・サトウの神道観」『明治聖徳記念学会紀要』38、ウルズラ・フラッヘ（江口大輔訳）2008「ドイツ語圏の日本学における神社に関する研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』148、平川祐弘2013『西洋人の神道観—日本人のアイデンティティを求めて—』河出書房新社、佐藤一伯2013「明治期イギリス人の神道論に関する一考察—W・G・アストン『神道』について—」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』7、佐藤一伯2015「近代日本学者の神道論—その系譜的一考察—」『明治聖徳記念学会紀要』52、小山騰2017『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み—国学から日本学へ—』勉誠出版、牧野陽子2020『ラフカディオ・ハーンと日本の近代—日本人の〈心〉をみつめて—』新曜社、が挙げられる。

なかでもラフカディオ・ハーン研究者の遠田勝は、西洋人の神道評価には大きく①サトウ、チェンバレン、アストン（後述）ら日本アジア協会会員の学術研究、②ハーン、ブルーノ・J・F・タウト、アンドレ・マルローら芸術家の見方、という2つの流れがあると指摘する。①が当時から現在に至るまでの欧米における学術的な神道研究の本流であり、神道とは祖先崇拜（あるいは自然崇拜）を核にした原始的民俗宗教に過ぎず、その役割は仏教渡来をもって衰退したと捉えるものである。一方、②は感性豊かに日本文化の深層を見出そうとし、日本文化の中核に神道を位置づけたもので、学術研究とは全くみなされてこなかったものの日本国内では後世まで大きな影響をもってきたという⁸。

本稿はこれらの先行研究に依拠し、特に遠田が論じたこの2つの流れを基本的な枠組みとしながら、祖先崇拜をめぐる言説を、神道ではなく祖先崇拜研究史の前史として再構成していく。なお、日本文化を紹介する書物は英語のみならずフランス語やドイツ語によるものなども含めて多数刊行されたため、本来はそれらも含めた検討が求められるが、本稿では扱いきれない。本稿は明治期にあたる1870年～1910年頃までのジャパノロジストによるものを対象に、俯瞰的な見取り図を描くことを目的とし、さらなる詳細および拡幅は今後の課題としたい。

2. スペンサーの進化主義的な祖先崇拜論

まずは19世紀西洋の進化主義パラダイムにおいて、宗教の起源を祖先崇拜とみなす説が花開いた経緯を確認しておきたい。その契機となったのは、ヌマ・ドニ・フステル・ド・クーランジュの大著『古代都市』⁹（1864）であった。同書は、古代ギリシア・ローマ社会で祖先崇拜を軸とする家族宗教が行われていたことを明らかにし、当時の学界に大きなインパクトを与えた。

8 遠田勝1988「神社の感覚—ラフカディオ・ハーン的神道発見 その四—」『近代』（神戸大学）65、遠田勝1994「西洋人の神道理解—ハーン、タウト、マルローの場合—」平川祐弘編『世界の中のラフカディオ・ハーン』河出書房新社。

9 Fustel de Coulanges, N. D., 1864, *La Cité antique*, Paris: Librairie Hachette. 邦訳はフステル・ド・クーランジュ（田辺貞之助訳）1944・1948『古代都市—ギリシア・ローマにおける宗教・法律・制度の研究—』上・下、白水社。

そしてエドワード・B・タイラーが『原始文化』¹⁰（原著1871）で、『古代都市』をふまえ、アニミズムを宗教の起源ととらえてその発展の過程を描いた。タイラーによれば、進化の水準が最も低級な人々も魂の観念をもっており、しだいに人間から動物や植物、無生物も魂を持つとの観念、そして魂が死後も存続するとの発想が生まれると、転生、来世、そして靈的世界の観念へと広がっていく。そのなかに位置づけられる祖先崇拜は、「直接的な家族関係だけに限定されるものではない」（下巻 p.137）とされ、事例として、死んだ友人の霊や嬰兒の死霊が利益・災厄をもたらす例や、一代の英雄が死後広く公衆から崇拜されて高位の神々になる例、伝説的な祖先、軍神、中国での孔子崇拜、インドでの亡父への供物を捧げる息子を血縁を問わずに必要とする風習、古代ギリシア・ローマでの歴史上の人物の神格化など、多様なものが挙げられる。さらにはキリスト教の聖人崇拜までも古代の死者崇拜の残存と位置づけられる。その一つに日本の神道も含まれており、タイラーはシーボルトの『日本』とケンペルの『日本誌』を資料として「かつての山地民たちは聖なる先祖、すなわちカミを崇拜し、その庇護と祝福を願って祈っていたのである」（下巻 p.135）と説明している。

タイラーの説を一部（無生物に魂が宿る観念の解釈について）批判したものの、大筋で同意しつつ発展させ、祖先崇拜を宗教の起源として位置づけたのが、スペンサーの『社會學之原理』第一巻¹¹（原著1874～75）であった。スペンサーは、死霊の観念に端を発する祖先崇拜を最も原初的な宗教と位置づけている。スペンサーによれば、未開人が超自然的存在について最初に抱く観念は死霊の観念であり、人類史上、集団を形成した人々は全て、死者の再生に関わる観念をもっていた。ただし祖先の墓を設けた土地を去ってつねに移動し続ける民族

10 Tylor, E. B., 1871, *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art and Custom*, London: John Murray. 邦訳は E・B・タイラー 2019 (1871) 『原始文化』上・下 (宗教学名著選 第5・6巻)、松村一男監修、奥山倫明ほか訳、国書刊行会。主に「第14章 祖先崇拜」を参照。

11 Spencer, H., 1874-75, *Principles of Sociology*, Vol. I, London: Williams and Norgate. 邦訳はスペンセル 1885 (1874-75) 『社會學之原理』 乗竹孝太郎訳、経済雑誌社。主に「第二十章 祖先ヲ崇信スル風習」を参照。

には、素朴な死霊の観念はあっても祖先崇拜は見られない。定住が始まり、さらに靈魂の永続性の観念が生じることで、墓地や葬礼が発達し祖先崇拜の風習へと発展するのだという。それも、当初は近祖のみが崇拜されるにとどまるが、権力者や偉人が後世の人々に記憶されるようになると遠祖の崇拜が始まり、そうしたものが神格を帯びて、ついには、高名でない祖先に対する崇拜が衰退していくとの過程をスペンサーは論じている。祖先崇拜は全ての民族がある段階で必ず一度は通過しており、最も開化したプロテスタントが墓に花を飾るのも祖先崇拜の思想が存在していることを示す証拠だ、というのがスペンサーの宗教起源説である。

このように、タイラーとスペンサーは祖先崇拜を、あらゆる文化社会に相通ずる宗教の始原として位置づけている。注意したいのは、そうした位置づけは祖先崇拜の概念を極大化することによってこそ可能となっていることである。彼らの祖先崇拜概念は、現在われわれが一般用語や学術用語として用いるような「祖先」、すなわち一家一族の初代ないし代々の死者への信念や儀礼という意味には全くとどまっていない。彼らは宗教の進化を単線的に連続した道程として描き出すなかで、靈魂観念が生じるところから、儀礼が始まり、近祖・遠祖の崇拜、そして偉人や聖人の崇拜と神格化に至るまでという、非常に広い範囲を「祖先崇拜」に含めて論じているのである。別言すれば、ここまで祖先崇拜概念を拡張しなければ、あらゆる宗教的観念を彼らの描く一本の進化の図式のなかに包摂し、祖先崇拜を宗教の起源として位置づけることはできなかったということである。

なお後述するように、以上みたタイラーやスペンサーの説は、19世紀後半から20世紀初頭までの長きに及んだ宗教起源論争の比較的初期の段階では広く支持されたが、しだいに彼らの祖先崇拜概念は不適當だと批判されるようになり、間もなくして省みられなくなった¹²。したがって、その影響については限定的に

12 エドワード・ウェスターマーク（人類学）やヴィルヘルム・M・ヴント（心理学）、フランク・B・ジェヴォンズ（哲学・宗教学）、ヨアヒム・ワッハ（宗教学）、そしてエミール・デュルケム（社会学）らが、スペンサーらの説を批判した。

とらえるべきであり、過大に評価する必要はない。しかしながら、以下でみるように、1870～1890年頃の神道論においては大きな影響力を持ったと考えられるのである。

3. 明治初期の日本アジア協会における神道の祖先崇拜起源説

宗教の祖先崇拜起源説がイギリスで勢いをみせていたのとちょうど同じ頃、1872年（明治5）の横浜で、日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）¹³が設立された。同協会はイギリスの対日戦略の一環として通商・植民化の可能性を探るための徹底的な事情調査を行うことを目的に、日本含むアジアについての、海洋や地質、植生、気候といった自然科学領域から言語や文学などの人文領域までのあらゆる研究成果を横断的に共有する学術団体であった。当時、神道国教化政策の開始を受けて同協会では神道の解明が大きなテーマとなり、その議論のなかで祖先崇拜が大きな位置を占めるようになっていくのである。

本節ではまず、協会設立直後の例会で行われた通称「神道シンポジウム」の内容を確認したい。続いて、同会の会員であったアーネスト・M・サトウ¹⁴、バジル・H・チェンバレン¹⁵、ウィリアム・G・アストン¹⁶の3名による神道論を中心に、その内容を明らかにしていく。この3名は「三大ジャパノロジスト」と称され、日本文化に関する著作を複数発表し、イギリスにおける日本学の基礎を築いたことで知られる。

(1) 「神道シンポジウム」での意見交換

日本アジア協会の雑誌 *The Transactions of the Asiatic Society of Japan* 創刊号

13 日本アジア協会についての先行研究は、楠谷重敏1998『イギリス人ジャパノロジストの肖像—サトウ、アストン、チェンバレン—』日本図書刊行会、同2017『ジャパノロジー—はじめ—日本アジア協会の研究—』晃洋書房、を参照。

14 1843-1929。滞日期間は1862-1883年、および1895-1900年。在日代表部日本語書記官。

15 1850-1935。滞日期間は1873-1911年。東京帝国大学文科大学教師。1883年『古事記』の英訳を出版。

16 1841-1911。滞日期間は1864-1889年。イギリス公使館通訳生に着任後、通訳官、書記官補、兵庫領事、韓国総領事、在日イギリス公使館書記官を歴任。1896年『日本紀』の英訳を出版。

には、サトウが例会で“The Shin-tau Temples of Ise”（1874）と題する口頭発表を行った際に、フロアで交わされた意見交換の内容が記録されている。この意見交換は事前に企画されたものではなく自然に発生したもののようであるが、先行研究では「神道シンポジウム」と呼ばれてきた。

このサトウの口頭発表は、1872年（明治5）に外国人として初めて伊勢神宮を公式参拝した経験にもとづく。その内容は、日本人にとっての伊勢神宮はパレスチナやメッカに相当する聖地であるものの、人々は参詣にかこつけて快樂に走っていると、神道建築の単純さと脆弱さは失望に値するといったように、神社や神道をネガティブに評したものであった。そしてこの発表に続いて行われた「神道シンポジウム」での主な発言は、記録¹⁷から要約して記すと次のとおりである（下線は引用者による）。

ジェームス・C・ヘボン¹⁸：私も神道を理解すべく懸命に努力したが、信頼すべき書物を見出せなかったためあきらめた。たいていの祈祷書には、人間が罪を犯したらその穢れを清める必要があると書かれているのみである。

サトウ：神道には道徳律が欠けているとの指摘に同意する。本居宣長によれば、道徳律は中国人が発明したもので、それは中国人が非道徳的な民族である証拠であり、一方の日本人は自分の心に従えば正しい行動がとれるため道徳は不要であるという。日本人の至上の義務はミカドの命令への服従であり、だからこそ維新後に明治政府は神祇官に高い地位を与えた。

マックス・V・ブランド¹⁹：古代神道と、近年宮廷周辺で発展した神道とは区別される必要がある。元来の神道は、力を生み出す光や火、太陽など

17 Satow, E. M., 1874, “The Shin-tau Temples of Ise,” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.1. 邦訳は、楠家前掲書（2017）。この神道シンポジウムについては、遠田前掲論文（1988）が詳細に論じている。

18 1815-1911。1859年、北アメリカ長老教会の医療伝道宣教師として来日。この神道シンポジウム当時、日本アジア協会会長を務めていた。

19 1835-1920。1862年、プロイセン王国の初代駐日領事として来日。

の崇拜で、それらの力の原理がいくつかに分解され、各宗派の特殊なカミとして祀らせるようになった。神道と古代中国の宗教とはきわめて類似する。

ハリー・S・パークス²⁰：私も神道とは何かが分からず失望している。多くの日本人も神道をどう説明したらよいかわからないようだ。だが、(引用者注：プラントの言うように)かつての土着信仰が近年、支配者の都合のいいように使われているとすれば納得がいく。神道の起源が中国の古代宗教と密接に関連しているというプラント氏の説に同意する。いくつかの儀礼は他のアジア諸民族の迷信とも関係があるだろう。神道がもし宗教として成果を挙げ、日本人の宗教感情に深く根づいていたとしたら、あれほど完全に仏教にその地位を奪われることはなかっただろう(引用者注：つまり、仏教が普及したのは神道が根づいていなかったことの証左である)。

サミュエル・R・ブラウン²¹：神道はことばの正しい意味での宗教とはいえない。私は訪日して14年、神道を知ろうと努力してきたが、文献をいくら調べても報われず、神道の中身がいかに空虚かを知るのみであった。

『古事記』には最初の創造主が欠けており、無神論的である。道徳体系も、倫理も、儀式の規定も、礼拝対象としての神々も指定していない。神道には宗教に不可欠な一切の要素が欠けており、この世のいかなる宗教よりも貧弱で、空虚で、子供じみている。人間の心に沁みるものもなく、活気もなく、生命力を失っている。明治政府による神道復活の試みは完全な失敗に終わるに違いない。

森有礼²²：神道の中心的観念は死者を敬う感情だと思う。現在日本に存在する絶対的な唯一の政府を支えるために、神道を政治的に利用するのは

20 1828-1885。1865年、イギリス駐日公使として来日。

21 1810-1880。1859年、アメリカ・オランダ改革派教会の宣教師として来日。

22 1847-1890。駐英公使としてロンドンでスペンサーと親交した。当時『社会学原理』第2巻第5部を執筆中のスペンサーは、日本に関する多くの情報を森から得たという(山下重一1975「明治初期におけるスペンサーの受容」『年報政治学』26)。

正当である。ただし、日本の古代の記録が全く信頼性に欠けることは認めざるをえない。

プラント：西欧諸国が理解しているような宗教の性格が神道にあることを知る人は今日ほとんどいない。来世観の叙述が何も見出せない。死んだ首長と一緒に牛馬や人身が葬られる事実は、この世と来世が連続しているとの信念を証明するにはほど遠い。

以上の発言から読み取れるように、当時の日本アジア協会の人々は神道を低く評価し、教典や記録も不十分で理解しがたいと考えていた。特に宣教師のブラウンは辛辣で、神道は宗教と称するに値しないという意味のことを述べている²³。

神道に対するこのような認識は、日本アジア協会会員のみならず、来日した外国人の多くが共有するものだったようである。たとえば日本初の御雇い外国人であったフランス人法学者のジョルジュ・H・ブスケ²⁴『日本見聞記』も、神道を「偏狭な異教の一種たる原始的な祭祀」(p.572)とみなし、神道の起源は太陽崇拝や自然力への崇拝の擬人化であるとしつつ、神道は「祖先崇拝以上のものは何も教えない」(p.584)とも述べている。そして、神道には礼拝・儀式・教理問答・道徳法典など重要なものがいずれもなく、人々の宗教心も全く欠けていると評している²⁵。

23 ここで述べられている「神道は宗教ではない」という文言は、その字句だけを見れば、ほぼ同時期である明治5～15年にかけての明治政府による神社政策をめぐって提唱された神社非宗教論（祭政一致と政教分離を目的に「祭教分離」を掲げ、神社は宗教ではなく治教であると論じるもの）と類似しているようであるが、その内実は全く異なる別の主張である。神社非宗教論およびこれまでの先行研究に関しては齊藤智朗2006「帝国憲法成立期における祭教分離論」阪本是丸編『国家神道再考—祭政一致国家の形成と展開—』弘文堂を参照。なお、この時点で、プラントが神道を自然崇拝あるいは力への崇拝と捉えているのに対し、森有礼が日本人の立場から、神道の中心的観念は死者を敬う感情だと述べている点も、対照的であり興味深い（ただし後述するようにサトウ以降は神道の基盤は祖先崇拝とみる見方が支配的となる）。

24 1846-1937。滞日期間は1872-1876年。フランスの弁護士で、旧民法草案の策定に携わる。

25 Bousquet, G. H., 1877, *Le Japon de nos Jour*, Paris: Librairie Hachette et Cie. 邦訳はジョルジュ・ブスケ1977(1877)『ブスケ 日本見聞記—フランス人の見た明治初年の日本—』全2巻、野田良之ほか訳、みすず書房。ただしブスケは「民間信仰」の項目で、次のように、日本人

(2) サトウの神道論

外交官や宣教師らが神道の理解は困難だと表明するなかで、初めて神道の包括的・体系的な理解に取り組んだのがサトウであった。サトウによる主な神道研究の業績は次の5点である。

1874年 “The Shin-tau Temples of Ise” 「伊勢神宮」²⁶ ※前述の口頭発表原稿

1874年 “The Revival of Pure Shin-tau” 「古神道の復活」²⁷

1878年 “The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese” 「古代日本の神話と宗教的祭祀」²⁸

1879-81年 “Ancient Japanese Rituals” 「古代日本の祝詞」(1)~(3)²⁹

1884年 “Religions: Shin-to” 「宗教一神道」³⁰

初期の「古神道の復活」(1874)で、サトウは次のように述べる。多くの西洋人は、神道には道德律・戒律がない、教典も唯一神もない、天地創造も死後世界もはっきりせず、記紀神話は荒唐無稽で意味がないととらえ、神道は宗教たりえないと断じている。しかし記紀や『古語拾遺』、祝詞を文献学的に研究

の祖先崇拜への熱心さについて述べていることには注意したい。「宗教的な勤行のうちで、祖先への敬意を表す行為以上に一般的に守られているものはない。日本人にあって不屈の確信が認められるのは、ここだけである。日本人は、社会のどの階級、どの宗派に属しようとも、その両親を、生きていれば尊敬し、亡くなれば礼拝する。……どの日本人の家に入っても、祖先への毎日の供物を載せた小さい祭壇を見出さないことはない。」(p.625)

26 Satow, E. M., 1874, “The Shin-tau Temples of Ise,” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.1. 邦訳はアーネスト・サトウ2006 (1874) 『アーネスト・サトウ 神道論』庄田元男編訳、平凡社。

27 Satow, E. M., 1874, “The Revival of Pure Shin-tau,” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.2. 邦訳は同上書。

28 Satow, E. M., 1878, “The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese,” *The Westminster Review*, vol.54. 邦訳は同上書。

29 Satow, E. M., 1879-1881, “Ancient Japanese Rituals,” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.7-9. 当初サトウは『延喜式』に載る27の祝詞全ての英訳注解を志したが、9篇で中断した。

30 Satow, E. M., Sidney Hawes, A. G. ed., *A Handbook for travellers in Central and Northern Japan*, second edition, revised.1884 (1881), London: John Murray. 邦訳は、アーネスト・サトウ編著1996 (原著初版1881、改訂第2版1884) 『明治日本旅行案内 上巻 カルチャー編』庄田元男訳、平凡社。

すれば、中国から渡来した儒仏の要素を排除して本来の日本人の心を探ることができるとし、そこには自然崇拜・祖先崇拜・精霊崇拜と、宗教的信仰心が認められる、とサトウはいう。そうした視点からサトウは、賀茂真淵・本居宣長ら複数の国学者の著述を紹介しつつ、特に平田篤胤を重視しており、平田の『松廼落葉』における、氏神の起源は村人らの先祖の合祀であるとの説や、もともと祖先崇拜の土壌をもっていた日本に仏教僧侶によって仏壇祭祀や死後は仏になるとの信念がもたらされたとの説、そもそも祖先崇拜は、邇邇芸命の天降りの際の天津神と国津神の崇拜や、神武天皇による天下平定の際の先祖祭祀にあるとの説、そして祖先崇拜はあらゆる徳、親への敬意や天皇への忠誠、友人や妻子へのやさしさをもたらすとの説を、詳細に紹介している。

小山騰によれば、サトウは1874年頃、気吹舎門人（平田派国学者）の和田重雄を教師に雇い、平田による基本的な文献を読破しながら、日本語を習得しつつ神道を研究していったことが推定される。さらにサトウは他にも白石真道、林甕臣、稲葉正邦などといった、複数の気吹舎門人らと交流をもっていたという³¹。サトウ自らが平田国学に関心をもってこの人脈を築いたのか、あるいはこの人脈が平田への傾倒をもたらしたのか、不明だが、いずれにせよサトウの神道理解が平田国学を基盤としていた点は重要である。

「古代日本の神話と宗教的祭祀」（1878）は古事記と日本書紀を分析対象とした論考である。それによれば、神道という宗教の原点は自然崇拜・祖先崇拜・精霊信仰だが、その後精霊崇拜は後退し、農耕施設を構築した祖先への限りない尊崇と、農業の原点である自然への崇拜という2つの信仰によって、古代日本人の宗教心は育まれたという。そこから新たな一歩として能動的な悪の神と善の神への信仰が生じるとともに、死者や自然の力を神格化し崇敬する祝詞や諸儀礼が定められていったといい、それは宗教の発展段階の初期に該当すると位置づけられている。そして同論考末尾で、タイラーの『原始文化』を引用し、神道と他民族の文化との共通性に言及している点が注目される。

31 小山前掲書、pp.86-128。

これ以後、サトウは数々の祝詞の翻訳と分析に取り組んだのち、1884年、その10年に及ぶ神道研究を『明治日本旅行案内』のイントロダクションのなかの一節「宗教—神道—」に簡潔にまとめた。サトウはこの節を「日本には神道と仏教という二つの宗教がある」(p.106)との一文で始め、神道について「その最も初期の段階では神道の趣旨は、祖先崇拜であったようだ」(p.108)と述べる。そして、その家族の先祖の神々が地域の産土神となり、かつ自然崇拜や精霊信仰が発達したのちに、君主の先祖を太陽とする信仰が生じたのだらうといい、また祖先崇拜が仏教に影響を与えた結果、死後は仏となり、仏壇のなかに先祖の位牌を祀るようになったという過程を描き出している。なお、この「宗教—神道—」と題した項には「宗教—仏教—」項が続いており、その内容はブッダの生涯、日本への伝来、宗派とその意義といった、文献にもとづく歴史や教義の記述となっている。

このように、当時のジャパノロジストのなかでも卓越した日本語読解能力を有していたサトウは、神話や祝詞、そして近世国学者のなかでも平田篤胤の精読をとおして、神道の初期段階としての祖先崇拜を見出し、以降の学説を牽引したのであった。ここでサトウのいう祖先崇拜は、やはりタイラーにならない、氏神信仰から神話の神々への祭祀、英雄神話、皇祖・皇室祭祀までつらなる大きな概念であった。

(3) 1890年代の神道論

チェンバレンの『日本事物誌』³²（原著1890、1936年まで6版を重ねた）は、当時の日本文化を活写した著作としてよく知られている。同書「神道」の項目でチェンバレンは、神道は日本に仏教が導入される以前の「神話や漠然とした祖先崇拜と自然崇拜」であり、まとまった教義も教典も道德規範もないため、宗教に値する資格がほとんどないという。そして、神道の進化は①紀元550年

32 Chamberlain, B. H., 1890, *Things Japanese: being notes on various subjects connected with Japan*, London: Kegan Paul, Trench, Triibner & Co. 邦訳は、チェンバレン1969 (1890)『日本事物誌』2、高梨健吉訳、平凡社。

ごろまでの、神々即ち皇室の祖先・偉人たちの霊および種々の神への崇拝が宗教的・政治的に行われた時代、②神道が仏教の中に取り込まれた時代、③1700年頃からの「純粹神道の復活」の時代、の3段階で進んできた」と述べている。このようにチェンバレンも（のちにアストンの成果を受けて論を変えるものの当初は³³）サトウと同様、神道のなかで祖先崇拝を重視した。

他にも、この時期には日本に滞在歴のある複数の論者が日本文化を紹介する書物を複数刊行しているが、そのなかでの宗教の説明はジャパノロジストの論をそのまま転用している傾向が強いようである。たとえばウィリアム・E・グリフィス³⁴は、1895年の *Religions of Japan* で、庶民の間では神道の真の基礎は祖先崇拝であったといい、祖先崇拝を保持しようとする日本人の執念によって儒教の渡来は歓迎されたと述べ、さらにこうした死者への畏敬の念は仏教に深く影響し変容を迫ったため、今日では両宗教の祭壇が同じ家に存在し、死んだ先祖は神となり仏となると述べている。そしてこのように、天皇から最も庶民的な信者まで、神道は祖先崇拝を基礎としており、その儀式体系に自然崇拝、さらには生殖器崇拝までが接ぎ木されているのだという。エドワード・J・リードというイギリスの造船技師も、1879年に来日し、翌1880年に日本の歴史・伝統・宗教を紹介する *Japan* と題した本を刊行している。そこでの神道の説明は

33 『日本事物誌』は増補改訂を重ね、新渡戸稲造の *Bushido* (1900、武士道の淵源として仏教・神道・孔孟の教えの3つを挙げ、神道については主君への忠誠、祖先への尊敬〔全国民共通の遠祖としての皇室の崇拝を含む〕、親孝行、自然崇拝、国土を祖先の霊の神聖な棲所とみなすことといった要素から説明)の影響を受け、また後述するアストン『神道』(1905)の論を踏まえたうえで、1912年には「武士道—新宗教の発明—」の項目を追加し、「神道は原始的な自然崇拝であり、すでに世の信仰を失っていたが、食器棚から取り出されて、塵を払われることになった」と評価して、それはかつてのあり方とは異なる「天皇（ミカド）崇拝および日本崇拝〔忠君愛国教〕」という「日本の新しき宗教」だと論じている。この点についてチェンバレンは1911年発表の「新宗教の発明」(*The invention of a new religion*, London: The Rationalist Press Association)でも、天皇崇拝・忠君愛国・武士道といった理念は日本の伝統でも特徴でもなく、近代の政府が国民統合のために発明し流布した「新宗教」であると、興味深い主張をしている。楠家重敏1977「B・H・チェンバレン研究序説—「新宗教の発明」における日本批判とその波紋をめぐって—」『史叢』20、を参照。

34 1843-1928。1870年、アメリカより理科教師として来日。Griffis, W. E., 1895, *The Religions of Japan, from the Dawn of History to the Era of Meiji*, New York: Charles Scribner's Sons, p.50, p.88.

もっぱらサトウやグリフィスの著述によっている³⁵。

以上みてきたように、19世紀末における日本アジア協会のジャパノロジストおよびそれに影響を受けた西洋人作家たちが神道の起源を祖先崇拜とみた要因は、次のように整理できる。

そもそもジャパノロジストの関心は、キリスト教宣教あるいは植民地支配への布石として、日本の新しい政治・社会体制や、その前提と考えられる日本人の宗教性を明らかにすることにあつた。そこで彼らがまずは1868年の神仏判然令にもとづいて「日本には神道と仏教という2つの宗教がある」（サトウ）と理解するのはもっともなことであつた。

この2つの宗教のうち仏教については、19世紀西洋の宗教研究において多くの仏教経典の翻訳が進んでいたため、西洋人学者たちはすでにその教義における哲学的・思想的な深遠さを知っており、そしてそれが祖先崇拜とは無関係であることも知っていた。したがって、日本人が熱心に祖先崇拜をしているとすれば、それはもう一つの宗教である神道の教義によるものに違いない、と彼らは理解したのである。

ではその肝心の、明治維新という革命の推進力となり、国教に定められようとしている神道についてはというと、ジャパノロジストたちにとってはほぼ全く未知のものであつた。しかし当の日本人に尋ねても、神道についての説明はほとんど得られなかった。先述したブスケも、「これらの人々に尋ねても無駄である、彼らは全く無知なのでこの問題については黙さざるを得ない」（p.573）と冷評している。明確な教義や教典が見当たらず、教学・信仰・倫理体系も不明な神道を、ジャパノロジストたちは原始的な宗教、あるいは宗教とはいえないものなどとして評価したのであつた。

そのようななかで、神道研究のパイオニアとして登場したのがサトウであつた。サトウはタイラーやスペンサーが用いるようなきわめて広義の意味での「祖先崇拜」概念と、平田国学とを結びつけ、天照大神祭祀・天皇祭祀・氏神祭祀

35 Reed, E. J., 1880, *Japan: its History, Traditions, and Religions, with a Narrative of Visit in 1879*, Vol.1, London: John Murray.

などを含む祖先崇拜の体系として神道を把握したのである。このように神道の原点として祖先崇拜を位置づける見方が、20世紀に入る頃まで、ジャパノロジーにおける定説となった。

4. ハーンの神道＝祖先崇拜論

前節でみたジャパノロジストたちとは対照的に、日本人の文化や精神性への非常な愛着をもって、そこにキリスト教化以降の西洋社会が失ってしまった本質的な宗教的世界観を見だし、称揚したのが、ラフカディオ・ハーン³⁶であった。平川祐弘によれば、ハーンは複雑な出自と不幸な生い立ちゆえに、イギリスの宗教や文化に反感を抱き、非白人的、境界的、辺境的な感性・心性・文化への強い共感的まなざしをもちえたのだという³⁷。54年の生涯で残された多くの著作のなかで、本稿では『知られぬ日本の面影』（1894）³⁸、『心—日本の内面生活の暗示と影響—』（1896）³⁹、『神国日本—解明への一試論—』（1904）⁴⁰を取り上げたい。

(1) ハーンの神道論

ハーンが来日後初めて著した作品集『知られぬ日本の面影』（1894）の「家の内の宮（The Household Shrine）」と題した章では、「日本には死者の宗教（the

36 1850-1904。ギリシャ西部レフカダ島出身の母と、イギリス人軍医の父のもとに出生。幼少期に両親に捨てられ、また事故で左目を失明。親戚にも遠ざけられ寄宿学校等で育つが、その親戚の破産により17歳で退校を余儀なくされた。1869年にアメリカに移住し、ルポルタージュ記者としての地位を確立したのち、1890年来日（以上、平川前掲書、pp.106-111）。島根県尋常中学校・熊本第五高等中学校英語教師、神戸クロニクル社勤務を経て、1896年（明治29）、帝国大学文科大学講師として英文学を講じる。1903年より早稲田大学講師。1904年、54歳で死去。

37 平川前掲書、p.106-109。

38 Hearn, L., 1894, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Boston: Houghton, Mifflin. 邦訳は小泉八雲 1926 (1894) 『知られぬ日本の面影』（『小泉八雲全集』第3巻）、落合貞三郎ほか訳、第一書房。

39 Hearn, L., 1896, *Kokoro: hints and echoes of Japanese inner life*, Boston: Houghton, Mifflin. 邦訳はラフカディオ・ハーン1951 (1896) 『心—日本の内面生活の暗示と影響—』平井呈一訳、岩波書店。

40 Hearn, L., 1904, *Japan: An Attempt at Interpretation*, New York: Macmillan. 邦訳はラフカディオ・ハーン1976 (1904) 『神国日本—解明への一試論—』柏倉俊三訳注、平凡社。

Religion of the Dead) が二種類ある」とし、それは神道と仏教だと述べられている。そのうち神道とは、ハーンによれば「原始的な信仰で、普通には祖先崇拜と呼んで居る」。つまりハーンにおいて、神道とはすなわち祖先崇拜なのである。神道の原始的儀式や、古代の祈祷の文言や表象、神社の来歴、最も貧しい崇拜者の素朴な思想のなかにまでも、スペンサーがあらゆる宗教の根本 (the root of all religions) と呼んだ、死者への畏敬の念が明らかに顕れているとハーンはいう。また偉大な神道学者・平田篤胤も、神道の神々は亡霊で、死んだ者はことごとく神になると述べており、祖先の霊に敬虔であることが日本人のあらゆる徳の源泉だと述べているとハーンはいう⁴¹。

この『知られぬ日本の面影』の2年後に刊行された『心』には「祖先崇拜の思想」と題した章がある。この章はジャパノロジストや宣教師らへの反論として神道を、有史以前に起源し、悠久の歳月を経て心の宗教 (a religion of the heart) となって、うわべは変貌しようとも生き続けているものと説明する。ハーンによれば神道の基礎的な観念は、①全ての死者は神となる、②死者は現世に実在し、生者と共に生活し、悲喜を分かちあい、子孫を保護しその繁栄を喜び、また供物や顕彰を喜ぶ、③死者は生者の思想行為や、自然界の状態にも影響を及ぼす、というものだという。そしてハーンは、われわれ人間は先人たちの経験や知識、業績といった過去の遺産を受け継ぎながら生きていると述べ、東洋では大家族観のもとで、そうした祖先たちに対する深い感謝・尊敬・愛情を抱いており、愛国心・孝道・忠義などは全てそこから生まれるという。日本の大家族の観念は、それが国家危急の場合には国民全体が大家族になるところまで拡大する。西洋でも古代はそうだったが、キリスト教によって滅んでしまったとして現代の西洋社会を批判している。なおハーンは最後に、「最も偉大な哲学者でも——ハーバート・スペンサー氏でも語るができない」(p.273)、人類の起源を宇宙にまで遡らせるような思想の一端が神道には認められると

41 一方でハーンはこの論考で、祖先崇拜は確かに神道の著しい特徴だが、それだけでこの国家的宗教 (the State Religion) が成っているわけではなく、天皇のために死ぬ自己犠牲や忠義の念が神道であるとも述べている。

いった内容を述べている。これは神道思想にヒントを得たハーン自身の壮大な世界観の開示とみなせるだろう。

このようにハーンは日本の神道を祖先崇拜と同定し、神となった死者を信仰し儀礼を行い、死者とともに暮らす世界観として理解し、家族観や国家観につながる根底的な宗教観として熱烈な賞賛の言葉とともに描き出した。そのうえで、祖先崇拜を行っていない西洋に対する日本の優位性として位置づけた。

(2) 『神国日本』

1904年（明治37）発表の『神国日本』はハーンの遺作である。本書でハーンはまず、日本人の精神・文化の根幹をなすのは儒教でも仏教でもなく神道だと述べる。そしてチェンバレンらによる「神道は倫理を欠く」との見解に反論し、神道の倫理とは「死者の支配」すなわち共同体意識であり、その根源は村落の慣習や不文律にあると述べながら、例によって神道への最大級の賛辞が続く。

本書においても、ハーンの祖先崇拜理解の基軸が明らかにスペンサーの説、すなわち死者の霊（ghost）に対しての礼拝こそが全ての宗教の根源であり、しだいに上級の神々が出現してくるとする宗教発達説にあることがわかる。ハーンはスペンサーに依拠しながら、洋の東西を問わずどこの国でも、祖先崇拜は「生者の幸福は死者の幸福しだいである」との考えを基礎としており、この考えにもとづく祭祀が家族組織や財産・相続法などの社会構造を規定してきたという。また、祖先崇拜の進化の歴史はどこの国でも大体同じようなもので、日本の祭祀の歴史も例にもれず、スペンサーの宗教発達の法則の好例であるという。つまり言い換えれば、「実際進歩した人間社会は、どれもその歴史のある時期において、祖先崇拜の段階を通過してきている。しかし現在、ある精緻な文明と共存しているこの祖先の祭祀を見なければならぬとあれば、それには極東の日本ということになる」（p.27）のである。さらにハーンは、神道は古代ヨーロッパの信仰と全く同じとも述べており、これらの主張の論拠として、フュステル・ド・クーランジュ『古代都市』、およびサトウとアストンの翻訳による平田篤胤や本居宣長の著作が用いられる。なお、アニミズムは祖先崇拜

の以前から存在していたとする説は、あっさりと斥けられている (p.111)。

このような枠組みのもとで、ハーンは、日本の真正の宗教は祖先崇拜だと論じる。日本における祖先崇拜とは「すべての文化を誘導する宗教の土台であり、またすべての文化的社会の土台となってきた」(p.19) 祭祀だという。そこに他界観はなく、死者は現世の墓に居住し、供物や子孫による尊崇を必要とすると、また立派な墓と供物があれば幸福を、なければ不幸を与えると信じられているという。日本の祖先崇拜のうち、仏教形式のものを別として、純粹に日本起源なのは「家庭の祭祀」、「地域社会の祭祀」(平田篤胤による、氏族の共通の先祖としての氏神論から)、「国家の祭祀」の3つの儀式であるとする。この3つは順に発展し8世紀までに完成をみたもので、これらの総称が「神道」だ、というのがハーン理解である (p.19)。そして最後にハーンは「日本人を論じて彼らは宗教には無関心だと説くほど、馬鹿げた愚論はまずあるまい」(p.395)と述べている。これはチェンバレンの『日本事物誌』に対する正面からの批判であろう。

対するチェンバレンの方も、『日本事物誌』の最終版、1939年(昭和14)の改訂第6版で、侮蔑的な表現まで用いて、ハーンの神道理解を非難している。こうしてハーンとチェンバレンは深刻に対立し、絶縁するにいたったという⁴²。

このように、ジャパノロジーの成果を存分に援用しつつも、ハーンの神道理解はジャパノロジストとは相いれないものとなった。ハーン、およびタウトやマルローによる芸術家的な神道理解の流れについて、遠田勝は、彼らの日本語読解力がジャパノロジストに遠く及ばないため、言葉や論理から神道を理解しようとは初めから思っておらず、言葉以外の神社や森、滝、それらを崇める人々から、日本人の信仰を感じようとしたことによると論じている⁴³。

42 ハーンは『心』で、宗教的な性質とは遺伝的、生得的なもの、血として流れているものであると、長文にわたって論じている。主にこの点でハーンとチェンバレンは決定的に対立し、論争を続けたが、ついに袂を分かったとされる(遠田勝1985『『神国日本』考—チェンバレンとの対立をめぐって』『比較文学研究』47、山下重一1994「ハーンとチェンバレンの「スベンサー論争」『英学史研究』27)。

43 遠田勝1992「小泉八雲—神道発見の旅—」平川祐弘編『小泉八雲—回想と研究—』講談社、p.410。

とはいえハーンの著作は、当時の日本の知識人には大いに支持された。たとえば、ハーンと親交のあった岡倉天心は『東洋の理想』（1903）の「日本の原始美術」と題した章で、「神道の名で呼ばれる彼ら（引用者注：大和民族）の宗教は祖先崇拜の素朴な儀式であった」（p.17）と述べ、また伊勢神宮と出雲大社を「清浄無垢の祖先崇拜の聖殿」（p.18）と説明しており、ハーンの強い影響が認められる⁴⁴。

5. 神道の自然崇拜起源説の登場と定着

(1) アストンによる神道の自然崇拜起源説

サトウやチェンバレンの神道研究を受け継ぎながらも、神道の起源を祖先崇拜とみる彼らの説に対して真っ向から異議を唱えたのがアストンであった。アストンは1896年に『日本紀』を英訳出版したのち、1905年（明治38）に *Shinto* (*The Way of the Gods*)、『神道—神々の道—』⁴⁵と題し、西洋人として初めて、神道を主題とする大著を刊行した。「訳者あとがき」によれば、同書はアストンによる日本研究の集大成にあたるという。

同書「序文」でアストンは神道について、多神教的で最高神がない、偶像や道德律がない、靈魂観の人格化が弱い、来世観がない、深い信仰がないといった点では、文字記録を持つ宗教のなかでは最も未発達な宗教だが、組織化・階級化された神官と念入りの祭儀がある点で原始宗教ではないと述べている。そこで同書は、宗教学に資するための神道に関する資料提供と、神道を題材とした宗教起源論、および宗教の発展の初期段階についての理論を提示することを目的としているという。特にアストンはスペンサーの説について複数回にわた

44 Okakura, K., 1903, *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*, London: John Murray. 邦訳は、岡倉天心1983（1903）『東洋の理想 他』佐伯彰一ほか訳、平凡社。同書「解題」によれば、当初500部出版されたが、評判をよびさらに1000部が再版され、また岡倉没後にはフランス語訳・ドイツ語訳も出版され、さらに1941年（昭和16）には日本で邦訳も出版された。

45 Aston, W. G., (*Shinto The Way of the Gods*), 1905, London: Longmans Green and Co. 邦訳はダブルユー・ジー・アストン1922（1905）『日本神道論』補永茂助ほか訳、明治書院、およびW・G・アストン1988（1905）『神道』安田一郎訳、青土社。

り言及し、アストンが解明した神道の起源がスペンサー説の反証になるとの趣旨の記述をしている（『宗教の起源についての彼の理論は、読者が自分自身で判断を下すだろう』p.194）。

一方アストンは、タイラーの『原始文化』とジェームズ・G・フレイザーの『金枝篇』に大きく依拠し、その宗教の起源論や進化論、類型論のなかに神道のカミヤミタマといった観念を位置づけていく。神道を原始あるいは未発達な宗教と位置づけるこの立場は、前述の、幕末～明治初期のヘボンらの議論に異を唱えた、サトウやチェンバレンと同様である。ただし、アストンは神道の起源に関して、サトウらと異なる見解を提示したのである。

同書は資料として記紀神話と『旧事紀』『出雲風土記』『古語拾遺』『姓氏録』『延喜式』、および本居と平田の思想、そして『風俗画報』を用いて、全14章をかけて神道の特徴、神話、神々、聖職、礼拝、道徳・ケガレ、儀式、呪術を論じている。注目すべきは最後の第14章「神道の凋落、その現代の分派」で、現在では国家宗教としての神道はほとんど消滅し、維新で衰退した仏教の復興と、より強力なライバルであるキリスト教の出現によって揺るがされて、民間伝承・慣習として生き続けるだろうと述べている。この記述は、アストンが日本を離れた1889年（明治32）時点の神道をめぐる情勢についての所感といえよう。

さて、こうした同書の概要をふまえたうえで、「第3章 人間の神格化」の「祖先崇拜」項を要約すると次のとおりである。自然崇拜と人間崇拜という宗教的思想の二大潮流のうち、神道が人間崇拜に負っているものはわずかである。「祖先崇拜」の語を限定的に用いて、自らの直接の先祖を祭るものとすれば、神道にはその要素は非常に薄い。それに唯一該当するのは天皇の祖先の崇拜だが、しかしそれすらも6世紀以前に存在していたかは不明である。また確かに、平田篤胤『玉櫛 第十卷』は一卷全てを祖先崇拜の説明に費やし、自分の両親から家の創始者までの全ての祖先への祈願という、まさに正真正銘の祖先崇拜を描き出した書である。しかしそれは中国から輸入した崇拜であり、神道ではないのである。術語を注意深く使用するならば、自然神や階級の象徴を祖先とみ

なすことは、本来の祖先崇拜ではなく「にせの祖先崇拜」（訳書 p.53、原著では pseudo-ancestor-worship であり「准祖先崇拜」や「疑似祖先崇拜」とも訳しうる）と呼ぶべきである。イギリスの哲学者エドワード・ケアードが『宗教の発展』で「多くの場合、崇拜される存在が祖先であるがゆえに神とみなされるのではなく、自らの神だと信じられるがゆえに自らの先祖だとみなされる」と述べているように、神道もまさしくそうである、と。これがアストンの祖先崇拜論である。

このようにアストンは、祖先崇拜概念を狭め、直接の祖先への祭祀に限定することで、従来の広義の祖先崇拜概念にもとづく祖先崇拜起源説を退けて、神道は実質的に自然崇拜だと論じたのである。

(2) アストンの神道論の定着

アストンの神道論⁴⁶が発表されて以降、ジャパノロジーでは、神道の起源や本質を自然崇拜とみなす説が主流となった。同書は1922年（大正11）に『日本神道論』の題で邦訳での刊行もされている。佐藤一伯によれば、アストンの神道論は新渡戸稲造や加藤玄智、さらにはGHQの神道観にも大きく影響したという⁴⁷。

その後、神道起源論争は、1908年に刊行された *Encyclopedia of Religion and Ethics*⁴⁸における中項目“Ancestor-Worship and Cult of the Dead (Japanese)”の記述をもって、学術的にはいったんの決着をみたといってよい。執筆者のミ

46 なおアストンは上記『神道—神々の道—』（1905）に続いて、『神道—日本の古代宗教—』（Aston, W. G., 1907, *Shinto: The Ancient Religion of Japan*, London: Archibald Constable & Co. Ltd. 邦訳はW・G・アストン1930（1905）『神道—日本の古代宗教—』白石喜之助ほか訳、新生堂）、“Shinto”（Aston, W. G., 1908, “Shinto,” *Transactions and Proceedings of the Japan Society*, Vol.7. 邦訳は、片山博2004・2005「アストンの「神道」著作に関する予備的研究（その1・2）神道論試訳」『融合文化研究』4・5）も発表した。これらの論考でも、古神道の神々が自然神であって、祖先やその他の人間の神格化ではないことや、神道では霊観念が希薄であることが指摘され、従来の神道研究やスペンサーの祖先崇拜起源説が批判されている。

47 佐藤前掲論文、p.55。

48 Hastings, J. ed., 1908, *Encyclopedia of Religion and Ethics*, New York: T. & T. Clark. 戦前における最も権威ある、宗教学関連の事典。

シェル・ルヴォン⁴⁹は、サトウ説とアストン説を挙げて「真実はその2つの説の間にある」と述べている。すなわち、国学者やサトウらは古い神道関連史料の記述のなかから中国由来の思想の痕跡を排除する作業を怠ったために祖先崇拜起源説を提唱してしまったが、一方でアストンのいうように「神道には真の祖先の崇拜がなかった」とまではいえないというのである。8世紀の豪族たちが行っていた氏神崇拜が遠祖・自然神・人神を神格化して崇拜するものだったことからわかるように、大多数の原始宗教と同じように当初の神道にも祖先崇拜の萌芽はあり、だからこそ早期に中国式の祖先崇拜が日本に輸入され定着したのだ、というのがルヴォンの見解である。

以降～1920年代までの西洋人による神道論については、本稿で網羅することはかなわないが、いくつか挙げておきたい。たとえば、ドイツ初の神道研究書であるエミール・シラーの *Shinto* (1911) には、もともと神道の原理は自然への礼拝だが、歴史の推移とともに、ミカド崇拜、祖先崇拜、偉人崇拜、多神教、祈願・祭祀といった多くの要素が発生してきたとある。ゲオルク・シュールハンマーも、*SHIN-TŌ* (1923) でイエズス会宣教師の立場から神々や各地の神社を詳しく紹介しているものの、祖先崇拜の要素には全く言及していない。フレイザーは *The Worship of Nature* (1926) で、日本古代の宗教である神道は本質上は自然崇拜で、それが自然界の対象を人格化して崇拜するようになったものであり、したがって原初の神道を祖先崇拜とみなすのは誤りだと述べた⁵⁰。

6. おわりに

明治期のジャパノロジーにおける祖先崇拜論は、当時の西洋における人類学

49 1867-1947。1893年、ボアソナーの後継として来日。法学者。東京帝国大学法科大学教授、和仏法律学校第2代教頭を歴任。著書に Revon, M., 1907, *Le Shintoïsme*, Paris: E. Leroux. がある。

50 Schiller, E., 1911, *Shinto: die Volksreligion Japans*, Berlin: Verlag Protestantischer Schriftenvertrieb. 同書の内容は安津前掲書に依拠した。Schurhammer, G., 1923, *SHIN-TŌ, Der Weg der Götter in Japan*, Bonn und Leipzig: Kurt Schroeder. 邦訳はゲオルク・シュールハンマー 2017 (1911) 『イエズス会宣教師が見た日本の神々』安田一郎訳、青土社。Frazer, J. G., 1926, *The Worship of Nature*, London: Macmillan and Co. Ltd.

的基盤のうえで展開したといえよう。本稿で確認してきたように、当初ジャパノロジストらは進化主義的な宗教起源論の影響下にあり、祖先崇拜概念を広義に捉えていたこと、また文献学的研究を主とし、なかでも平田国学を重視したことで、神道の起源を祖先崇拜だとみなすに至った。それに対して、ハーンの解釈は、日本の祖先崇拜をきわめて肯定的に評価する点で異彩を放つ。ただし、スペンサーに傾倒し、さらに祖先崇拜に自らの思想を読み込んだハーンこそ、より強く祖先崇拜＝神道との認識を抱いたと指摘できよう。20世紀に入り、スペンサーの説への批判的見解が優勢となり、神道の基盤は祖先崇拜ではなく自然宗教であるとの説が定着していく。そうなれば、元来ジャパノロジストの目的は日本の主たる宗教と考えられた神道の解明に取り組むことであったため、祖先崇拜はあっさり研究対象から後退していったのであった。

それでは、以降、日本の祖先崇拜はどのように研究されることとなったのだろうか。最後にラフスケッチを示しておこう。日本国内の宗教学では、岸本能武太がすでに1899年（明治32）の『宗教研究』でスペンサーの祖先崇拜起源説は受け入れがたいと表明している。そして姉崎正治が1912年（大正元）に『日本百科大辞典』の「そせん－志ゅうはい（祖先崇拜）」項に記しているところでは、天然崇拜と一般の死霊崇拜が宗教の第一期で、祖先崇拜は第二期に属することは「宗教学上の定説」となっているという⁵¹。このように、この時期の宗教学領域での祖先崇拜にかんする記述は、もっぱら欧文文献の紹介と、祖先崇拜が宗教の起源「ではない」ことの説明にとどまっており、日本の祖先崇拜の具体的な実態解明などが試みられることはほとんどなかった。ところが、これと同時期、宗教学での議論とはほぼ分断されたかたちで、倫理学や神道学、教育学を中心に国民道徳論が興隆し、そこに神社界も呼応しながら、肯定的なナショナルアイデンティティとしての祖先崇拜論が広く国民に定着していくことになる。さらに少し時代が進むと、日本国内において人類学および日本民俗学的な祖先崇拜研究が創始されるとともに、本稿冒頭に挙げた柳田の業績が結

51 岸本能武太1899『宗教研究』警醒社、姉崎正治1912「そせん－志ゅうはい（祖先崇拜）」齋藤精輔編輯代表『日本百科大辞典』第6巻、三省堂。

実していくのである。以上の一連の流れにおける、それぞれの言説の影響関係を解明することによって、日本の祖先崇拜研究史の淵源を詳しく描出することを、次なる大きな課題としたい。

How Did Meiji Era Japanologists View Ancestor Worship? : Before Empirical Research Began

Shiho Toishiba

It has been suggested that the study of ancestor worship in postwar Japan may have been directly/indirectly influenced by the evolutionist paradigm in 19th-century Western anthropology and the national moral ideology that dominated prewar Japan. As an attempt to clarify this issue, this paper examines the theories of Western-born Japanologists active during the Meiji period, particularly E. M. Satow, L. Hearn, and W. G. Aston, with particular attention to their conceptualization of ancestor worship, and aims to clarify how they positioned Japanese religion and ancestor worship.

The results of the review revealed that the theory of ancestor worship in Japanology during the Meiji period developed in step with Western anthropology. In the first place, the interest of Japanologists was to clarify the new political and social system of Japan and the religiosity of the Japanese people, which was considered a prerequisite for the new system, as a stepping stone to Christian missionary or colonial rule. In order to understand the unknown Shinto religion, they relied on bibliographical research and Tylor and Spencer's theory of religious origins and grasped the Amaterasu ritual, Emperor ritual, and Ujigami ritual as the development of ancestor worship.

In the 20th century, however, as Spencer's theory recedes in the West, Aston argued that the concept of ancestor worship should be limited to rituals to direct ancestors and that Shinto is in effect nature worship. Then, Japanologists lost interest in ancestor worship and did not make it a subject of study until after the war.